

これからも街ぐるみで、
子どもたちを想う街でありたい。

HITA
PRIDE
PROJECT



HIROSHI SONODA

1977年生まれ。藤蔭高から県内の大学に進み歴史学を専攻。卒業後、アルバイトを経て2007年から公益財団法人「廣瀬資料館」勤務。学芸員として古文書の整理などを行うほか、資料館や史跡咸宜園跡で来館者への解説なども行っている。

生の文化財、
見て歩いて



学芸員
日田市上手町
園田大
〈39〉

大学で学んだのは平安、鎌倉時代中心。でも廣瀬淡窓や久兵衛など地元の人々は、小さい頃から歴史の本で読んで興味を持っていましたので、学芸員として研究することに違和感はありませんでした。展示解説もしていますが、歴史に詳しい方も多く、教えられることもしばしば。「いいところだから」と市民が知り合いを連れて入館されたときは、うれしくて解説にも力が入りますね。日田には豆田地区をはじめ文化財があちこちにあり、町全体がさながら博物館。若い人たちには出来るだけそんな町並みを歩いて、生の文化財を目に焼き付けてほしいですね。市外に出ると、それが「すごいものだったんだな」と分かれると思います。そんな自慢、誇りがまたふるさとに戻りたいの思いにつながるのではないのでしょうか。

TOMOHIDE HASEBE

1974年生まれ。日田市中津江村出身。日田林工高卒。宇佐市や大分市で会社員として働く。父親の大病をきっかけに、約20年前中津江に戻り、地場産の柚子やわさびなどを加工して販売する農産物加工所「つえエビー」に勤務、現在は専務。

二度と帰らない、
と想っていたが…



農産物加工会社役員
日田市上津江町
長谷部知秀
〈42〉

若いころは「田舎は嫌だ。二度と帰らない」と想っていました。でも一度中津江を出たら実家が懐かしくて、両親も心配になつてきた。20代前半で帰ってきて、今の会社に入りました。地場の産物を加工する仕事を通じて地域貢献ができています。と実感します。田舎はいいですよ。緑があつて、清らかな水が流れ、風が気持ちいい。心が安らぎますよ。自然は宝です。中津江を含む旧郡部は人口減少が著しく、1人暮らしの高齢者も多い。だからこそ、ここで会社を続けたい。それがゆくゆくは、若い人が住める環境を維持することになるかもしれない、なにより外に出ていった人たちのふるさとを守ることにつながると思うから。

TAKUMI OKUDAIRA

1953年生まれ。日田市中津江村の奥平医院の長男として生まれる。佐賀県の高校を卒業後、東京の大学医学部を経て福岡大学病院に勤務。1993年に病院を継ぐため帰郷。「中津江の赤ひげ先生」として地域医療に尽力する。

頼りにしてくれる人が
いる限り…



医師
日田市中津江村
奥平卓巳
〈63〉

患者さんから電話があれば、夜中でも駆け付けていた父が、年をとってつらそうにしている姿を見て中津江に戻ることを決意しました。医師を志したのは、父の背中を見ていたからかもしれませんね。患者さんは皆、診療が終われば必ず「先生、ありがとう」と感謝の言葉を掛けてくれます。それがやりがいになっていくかな。子どものころに診ていた子が、大きくなって病院に来ることもある。患者さんとの関わりは自然と深くなるから、最新の医療機器はなくても適切な診断ができる。「地域に貢献したい」から休診はなるべく少なくしています。医院は、自分の代で終わるかもしれない。頼りにしてくれる人がいる限り、続けたいですね。

DAISUKE ISHII

1981年生まれ。日田高卒。宮崎県の大学へ進学、中退して大分県立農業大学校へ。大分市の豆腐製造直売店での勤務を経て、2008年から前津江町で、柚子生産を始める。「柚子農家DAI農園」代表。

収穫の喜びは
格別ですよ



柚子農家
日田市前津江町
石井大輔
〈35〉

静かな山間部の前津江にいてだけで心が落ち着きます。都会で仕事をしてきた時期もあつたけど、この生活が自分が一番合っていると思えます。柚子の収穫は8〜12月。それまでは、実を傷つけないように枝のトゲを取ったり、害虫が寄りやすいよう消毒をしたりと地道な作業ばかり。だからこそ収穫できたときの喜びは格別ですよ。農業が最も人間らしい仕事だなと感じています。自分も何をしたいのかわからないまま、学力に合わせて大学の教育学部に進みました。でも、よく考えたら教師にはなりたくないと感じていた。中高生の皆さんには、何をやりたいのか、好きなことはなんなのかを考えて、その道に向かつてほしいです。



地元の歴史は、
教科書を見るよりも、
お祭りを見た方がよくわかる。



どこへ行っても、
地元のご飯の味が
私の基準。

HITA
PRIDE
PROJECT

YASUTAKA ISAYAMA

1983年生まれ。藤蔭高から福岡市の大学を経て同市内の旅行会社に就職。5年後、リーマンショックや東日本大震災の影響で、客足が減った家業「みくまホテル」の経営立て直しを図ろうと帰郷した。現在「若旦那」の肩書きで国内外の旅行会社に対する営業活動などを担う。

広い視野と経験、
ふるさとに生かして



旅館業 日田市隈
諫山 泰崇 <33>

旅行会社の添乗員として各地の観光地やホテルなどを見てきた経験から、「お客さま目線」の経営と若手従業員の人材育成に力を入れています。福岡市で10年ほど暮らし、久しぶりに戻った日田は、水面に街灯が映る三隈川の景色が美しく印象的でした。若い人には「世界は広いぞ」と言いたいですね。でっかいヒマラヤ山脈、神秘的なオーロラ、美しいイタリア女性も…。いろんな世界を見て得られた広い視野と経験は人生の宝。それを少子高齢化が進むふるさとでの再生に生かしてもらいたいですね。みなさんの経験とやる気は日田の大きな戦力になるはず。そんな若者があふれる町になればいいなと切に願っています。

KEN NAGATA

1979年生まれ。東京育ち。都内の高校卒業後、アパレルの営業職やレコーディングスタジオ経営、ウェブ広告会社を立ち上げるなど数業種を経験。2014年、日田市へ移りコーヒーの移動販売店「ハゼボコーヒー」をオープンした。

夕日と朝日は
関東では見られない絶景



コーヒー販売 日田市上野町
永田 健 <37>

知人から譲り受けたワゴン車を改造して、コーヒーなど自家製の飲み物や手作りサンドイッチなどを売っています。津江産食材を使った「ツエンドウイツチ」も開発しました。挑戦したことがすぐ跳ね返ってくる仕事でやりがいを感じます。「センスが違うね」とか、鼻が膨らむような褒めの言葉もいただき、とても頑張れちゃいます。東京での生活は消耗戦をしているようで疲れてしまいい、両親がイターンしていた日田へ移住しました。暑さも寒さも利用して楽しめるし、夕日と朝日は関東では見られない絶景。悪いところはないです。中高生には、今から死ぬまで一流、一級品を体験し尽くしてほしい。これから自分で何かにチャレンジするときのために。

NATSUKO KAWAZU

1972年生まれ。日田高、大分県内の大学を卒業後、東京都のマーケティング会社へ。2000年、日田出身で会社の先輩だった勇成さん(44)との結婚を機にマーケティング会社「まめろし」を設立。2008年に日田市大山町へUターン。

何にでもチャレンジして



マーケティング会社代表 日田市大山町
河津 奈津子 <44>

大学では教育学部で障害者教育を学んでいて、当事者と学校との考えのずれを感じたことなどをきっかけに「みんなが住みよい社会をつくりたい」と思い、政治や世の中の流れを学ぼうと首都である東京に出ました。戻ったのは、長男が小学校に入学するとき夫の地元の大山町に帰省して「この学校に行きたい」と言ったから。子育てするなら地元の方が教えてあげられることも多いですね。現在はマーケティングの一環で地元野菜を使った飲食店「まめろし」「おすわけ野菜のレストラン松原」の経営に携わっています。中高生には仲間を大切に、何にでもチャレンジしてほしい。世の中には多くの職種があります。いろいろな経験すれば、本当の自分が見えてくると思います。

MASAHIRO YAHATA

1969年生まれ。大分市の大分高専で5年間学んで帰郷し、日田市の金属加工会社に就職。6年後に会社を辞めて木工業を学び、2000年に独立。2005年、自宅横の現在地に工房「ウッドアート楽」を設立。現在5人の従業員を抱える。

自ら流れ生み出す力を



木工職人 日田市大山町
矢羽田 匡裕 <47>

脱サラして木工業を始めたのは、もの作りが好きだったことと、もともと地元大山の役に立ちたいとの思いからでした。「大山で何が出来るか」「生こだわり続けられる仕事は何か」。考え続けて出した結論がこの仕事でした。私が作るのは、自分の世界観を表現した「作品」ではなく、家に飾ってもらえるようにデザインや価格帯を考えた「商品」。だから作家ではなく職人と呼ばれたいし、お客さまがその商品で笑顔になってくれることが何よりなんです。若い人には、流れに乗ることも大事だが、力が付けば自ら流れを生みだし、引き寄せたりすることも出来る、ということを知ってほしい。夢のためなら家や土地に縛られる必要はない。でも帰ってきたい、と思える町にしたいですね。



世界へ広がるお祭りで、
街は、年に一度一つになる。

HITA
PRIDE
PROJECT

RIKA HARADA

1977年生まれ。日田高から山口県の大学へ進学、在学中から地元FM局でパーソナリティーなどを務める。卒業後も継続しながらアナウンサー業を開始。2002年に日田へ戻り、市内のケーブルテレビ局「KCVコミュニケーションズ」へ入社。

困ったら帰ってきて



アナウンサー
日田市丸の内町
原田 梨加
〈40〉

会社では、アナウンスをはじめ企画、編集など放送制作業務全般に携わっています。歴史番組を作りたくて、放送局という仕事優先で自分の道を決めました。戻るかどうか、最初は何も考えていなかったです。進学した山口県で仕事をしたいけど「文化や歴史、土地の名前や道も全て分かる地元の方が仕事を進めやすくやりがいもある」と帰ってきました。日田は好きでほぼ何も不満はないけど、進学や就職、病院の少なさなど生活していく上での不安を感じます。中高生の皆さん、ここには応援者がたくさんいるので、いつ出て行っても戻ってもいい。何も気にせず好きな道を選んで、困ったら帰ってきてほしい。いつでも日田は待っています。

SATOSHI KONO

1980年生まれ。中学2年の時にスケートボードに出会う。大分市の楊志館高で調理師免許を取得。卒業後は福岡市でスポーツ用品店などに勤務し2006年に帰郷。3年後にスケボー用品・アパレル販売の店「トレエスビー」をオープン。スケボー教室のほか定期的に大会も開催。

好きなこと一生懸命に



スケボー用品店経営
日田市隈
甲能 聡
〈37〉

日田を出た理由は、競技人口が多い福岡で大好きなスケボーの腕を磨きたかったから。帰ってきた理由は「どこにいてもスケボーは出来る」と考え直したからです。スケボーは生活の一部でもあり、それが今の職業につながっています。将来は調理師免許を生かして、スケボー用品を扱うカフェを開きたいと思っています。日田は人が少なく商売をやるには難しい面がありますが、川が流れるこの町の雰囲気が好き。若い人には、とにかく好きなことを一生懸命やってほしいと思います。たくさん勉強し経験を積んで日田のために生かしてもらえば、町はもつとにぎやかになり、経済も活発になるんじゃないでしょうか。

DAISUKE AKIYAMA

1991年生まれ。日田三隈高卒。福岡県内の大学を中退し、飯塚市内の会社で働いた後、新規就農者として21歳で帰郷した。約2年間、日田市内の農家で修業した。西瓜と白菜を栽培している。

秋山君が
作ったものが食べたい、
そう言ってもらえるように



西瓜・白菜農家
日田市上諸留町
秋山 大輔
〈25〉

ふと手にした無料情報誌に同年代の農家が紹介されていて「若い人もやってるんだ、すごいな」と思うと同時に、甘くておいしいかった祖父の西瓜の味を思い出しました。すぐに決意して、会社を辞め2013年冬に帰郷しました。周りの農家さんたちは「頑張れよ」と応援してくれ、長年の経験で積み重ねた知識を惜しみなく教えてくれます。日に日に成長する作物を見ていると楽しいですよ。手をかけるほどに、いいものができずからね。トラクターも好きなんですよね。皆に「秋山君が作ったものが食べたい」と言ってもらえるような良いものを作りたい。日田の西瓜や白菜を全国的に有名にして、生まれ育ったこの町に貢献したいです。

KAZUMI FURUTA

1975年生まれ。日田高卒。神戸市の大学に進学し、求人情報会社や出版社のデザイン、編集部門を経て2004年に帰郷。材木商だった実家の築100年の蔵を改修して母が開いた「すてーき茶寮・和くら」に勤務。三隈川沿いの店にはソファの名品や古い家具、絵画、小鹿田焼などが並び、来店者の心を和ませます。

遠くから見ても気付く
日田の良さ



飲食店役員
日田市隈
古田 嘉寿美
〈42〉

本や雑誌を読んで、読む気になさるの見せ方とそうでないものがあることを知り、デザインに興味を持つようになりました。店でも実家の古い棚を塗り直して小鹿田焼を置いたり、遊牧民の手編みのじゅうたんを飾ったりして、空間をプロデュースしています。とても楽しく「前より雰囲気がよくなったね」と言われると、やりがいを感じます。都会のにぎやかさも好きですが、いずれは日田に帰るつもりでした。小さい頃から見慣れた川がある風景が忘れられなかったんだと思います。もし日田を出るか、出ないかと悩んでいる若い人がいるなら一度、離れてみてほしいと思います。遠くから見てもふるさととの良さに気付くからです。私も川があり、古い建物が残るこの風景を守りながら、上手に活用する、そんなまちづくりにかかわっていきたいと思います。

地元の花火は、
いくつになっても
愛おしい。

HITA
PRIDE
PROJECT

YOHEI HITAKA

1986年生まれ。日田林工高卒。福岡市の短大で造園を学んだ後、福岡県久留米市内の会社で3年間修業。23歳で日田杉や都市緑化木の苗木の生産販売をする家業を継ぐため帰郷した。4代目として「サン・グリーン」代表を務める。

日田が活気あるまちに
なっってほしい



苗木生産販売会社 日田市田島
日高洋平 <30>

家業を継ごうという使命感から帰ってきました。林業や木材産業など日田の産業の大本を支える仕事です。杉は約5種類、緑化木は約30種類を育てています。品種によって育て方が違い難しいですが、立派な苗ができる達成感があります。福岡から帰ってきて、日田では時間がゆっくり流れているように感じます。近所との付き合いも残っているし、居心地がいいです。仕事では「常に一生懸命であること」を意識しています。その日、その日、家族や従業員など周りの人を幸せにできるような頑張ります。日田にもいろいろな仕事があります。若い人が日田に戻って、活気ある町になっってほしいです。

MAKI OGATA

1980年生まれ。福岡県久留米市の中学・高校から北九州市の大学へ進学し、建設社会工学科で景観工学を専攻。建設事務所のアルバイトなどを経て2004年に帰郷、実家の「マルマタ林業」で企画総務課に勤務する。

日田の魅力
語り尽くせる人が
増えればいいな



林業会社員 日田市川原町
緒方万貴 <36>

戻るつもりで日田を出たわけではないのですが、実家の林業会社代表である母からの勧めもあり、帰って入社しました。山を歩いているの調査や切ってくれる人との打ち合わせ、事務手続きなどのデスクワークもやります。木は生きて成長しているの、手を入れれば入れるだけ応えてくれるのがいいですね。水や木、人など良い資源がたくさんあるのが日田。もつとよくなっってほしくて「ヤブクグリ」などのまちづくりグループにも入っています。自分たちの住む日田の魅力を語り尽くせる人が増えればいいな。中高生には、行きたい所に行つて会いたい人にガンガン会つてもらいたい。10〜20代前半には時間がいっぱいあります。どう使うのかは自分次第です。

RYUICHI WAKAMATSU

1984年生まれ。福岡県育ち。同県内の大学を卒業後、内装工事会社へ就職。退職後、2010年にアウトドア用品メーカー「スノーピーク」へ入社し、福岡、東京勤務を経て2015年2月に日田市へ移住。「スノーピーク奥日田」の店長。

都会には持っていない
景色がある



アウトドア用品メーカー社員 日田市新治町
若松隆一 <32>

大学卒業後に博多で営業職に就きましたが「なんで暑苦しいスーツで好きでもない仕事してるんだ？」と会社を辞めました。テントを持って数カ月の旅に出た後、スノーピークへ入社しました。もともとアウトドアが好きで、商品も使っていたので。日田へ来たのはここからの景色が気に入ったから。阿蘇山が見えて星もきれいで「この景色を見て毎日働けたらな」とキャンプ場のオープンに合わせて移住しました。テクノロジーや利便性を求めてきた反動で、これからは自然でアナログな楽しさを求める人が増えると思います。日田の景色は都会には持っていない。中高生には「都会より日田が格好良くて、憧れられるようになるかもよ」と伝えたいですね。

JUN KOYAMA

1978年生まれ。日田高卒。県内の大学、大学院で民俗学を学ぶ。佐賀市の大隈記念館の嘱託職員などを経て2010年に帰郷し、高瀬公民館へ、2015年4月からは天瀬公民館。年200回近い公民館の自主事業の企画・運営、広報活動などに取り組む。

ふるさととは
心のよりどころ



公民館主事 日田市川原町
神山淳 <38>

博物館で働きたいとの思いもありましたが、帰郷を決めたのは幼い頃から間近で見てきた大好きな日田祇園にずっとかかわっていたから。仕事の目標は、住民のための講座を考え実施し、公民館の利用者を少しでも増やしていくことです。天瀬公民館は年間延べ18000人のたくさんの人に利用されていますが、今後も地域に必要なものは何か考え、工夫してもっと多くの人に利用してもらえ取組みを進めていきます。若いときには地域行事に参加するのもよし、アルバイトに精を出すのもよし。さまざまな経験を積んでほしいと思います。ふるさとというのには心のよりどころで、気心の知れた仲間と見慣れた風景がある落ち着いた場所。いつまでも活気を失わず元気な町であってほしいと願っています。

井上百合

<52>

いろいろな経験を積んで
また日田に戻ってきて



YURI INOUE

1965年生まれ。日田高卒。京都の短大に進み、福岡の企業に就職した。結婚し東京在住後、2014年3月に帰郷。実家の井上酒造で、専務取締役兼杜氏見習いとして、「日田らしい酒」造りに取り組む。



三隈川の川面に映る夕日、杉

の木立からのぞく澄んだ星空。最初目に入ったのは、高校時代には気付かなかった日田の自然の美しさだった。そして何より、30年ぶりに戻ると旧友たちは温かかった。「何十人も集まってくれて、よく帰って来たねって。人の付き合いの濃密さ、それもふるさとの良さでしょうね」。都会暮らしがあったからこそその感動だろう。

小さい頃から、酒の香りに包まれて育った。「大人になったら家業を継ぐもの」との思いはいつも心にあった。それでも親の勧めもあり京都の短大に進学後、福岡市の会社に就職。米留学などを経て、会社で知り合った男性と25歳で結婚した。「いずれは一緒にふるさとで酒造会社を継ぎたい」。そんな思いも告げていたが、夫が本社のある東京に栄転、会社で重要なポストに就くにつれて言い出し

にくくなっていた。

専業主婦として東京で暮らし、帰郷をあきらめかけていた時、20歳を迎えた娘から「話がある」と食事に誘われた。「これまで育ててくれてありがとう。今帰らなかつたら一生後悔すると思う。これからはママの人生を歩んでほしい」。蓋をしていた思いがあふれてきた。別居も考えたが「井上酒造は井上」の姓で継がなければ。中途半端な思いは捨てたい。そう決意した。

2014年3月に帰郷。専務として「静かにおしゃれに輝く会社」を目指した経営を考える一方、杜氏見習いとして修業を積む毎日だ。「昔ながらの風味漂う酒を造りたい」と自社の田んぼで米作りから始めた。初年度は失敗したが、2015年の米で作った日本酒「百合仕込み」は周囲の協力もありいい出来に仕

上がった。「自分が手掛けた酒を飲むお客さまの姿を見たときが一番の幸せ」と語る。

日田は都会に比べて仕事も少なく給料も安い。高校を卒業した後に学べる場も少ない。「私は家があり家業があったから戻ってこられた」。若い人に日田に残り、日田に戻ってきてもらうには、企業側の努力、行政の支援が必要と感じる。

おいしい食べ物に豊かな自然や文化・歴史。そして何より、人の温かさ。日田の良さは数えだしたらきりが無い。だがそれは一度、外の世界を経験したからこそとも思える。

「日田は福岡都市圏にも近く、インターネットを開けばさまざまな情報も手に入る時代。若い人たちには一度外に出たとしても、いろんな経験を積んでまた日田に戻ってきてほしい。そして一緒にふるさとを盛り上げていけたらうれしい」。



「日田(ヒタ/ヒト)」 HITA PRIDE PROJECT VOL.1

平成29年3月31日 発行

発行 日田市企画振興部 ひた暮らし推進室
〒877-8601 大分県日田市田島二丁目6-1
TEL 0973-22-8383 FAX 0973-22-8324
編集・制作 西日本新聞社 大分総局 株式会社 西広
印刷 株式会社エポックアート